

風疹予防接種の考え方

―かかるのは大人・守るべきは妊婦と胎児―

笠間市立病院 石塚恒夫

昨年より風疹の流行が続いており、今年も早いペースで患者が増加しています。風疹は、発熱・発疹・リンパ節腫脹を主症状とするウイルス感染症です。麻疹（はしか）より軽症のため、「三日はしか」とも呼ばれます。小児の感染症と認識している方も多いと思いますが、1歳時と小学校入学前に2回の麻疹・風疹混合ワクチン接種が行われるようになり、免疫のない成人集団で断続的に流行する感染症となりました。

今回流行の中心は30～40代男性であり、風疹ワクチンを一度も接種しなかった世代です（女性のみ中学校で集団接種）。小児から感染する機会が減ったため、この世代の男性の15%は風疹に対する抗体を持ちません。同世代女性の抗体陰性は4%ですが、感染予防に不十分な抗体量の人が11%もいます。

成人が感染しても、関節炎を伴うことがあるものの重症化はしません。最大の問題は、妊婦感染に伴う胎児の先天性風疹症候群です（新生児の先天性心

疾患・難聴・白内障など）。風疹ワクチンは弱毒化しているものの、生きたウイルスを用いる「生」ワクチンであるため、妊婦には接種できません。妊婦もしくは妊娠する可能性のある女性を守るために、その周りの方（夫・家族など）がワクチンで免疫を高める必要があるのです。

実は9年前にも20～30代での流行があり、その時十分な対策をとらなかつたことが今回の流行の原因とされます。現在ワクチン不足のため、妊娠する可能性の高い女性や妊婦の夫・同居家族の接種が最優先です。しかし供給に余裕ができれば、50歳以下で2回の接種歴がない方はぜひ接種をお考えください。小児予防接種が普及して自然感染する機会が減ると、1回の弱毒化ウイルス接種では免疫が薄れてしまうこともあるからです。ワクチンが普及して感染する人が減っても、病原体が根絶されるまではワクチンは必要です。むしろワクチンによる免疫に依存するため、より多くの接種が必要になるのです。

笠間の歴史探訪 13

「安侯駅家」推定地

JR岩間駅から東へ7km、常磐自動車道の高架橋をくぐると、そこは笠間市安居地内。昔から八幡太郎義家が奥州征伐の帰り道、焼き討ちをしたといわれている「あずま（持丸）長者伝説」がある場所です。その畑からは焼き米が大量に出土し、古代道が通り、「安侯駅家」があったといわれています。

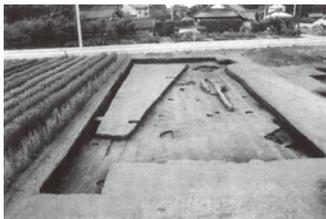
今から一三〇〇年前の奈良・平安時代の頃、蝦夷討伐のため中央と地方を結ぶ「駅路」が整備され盛んに兵士が兵糧等を運ぶため利用していました。この古代道には、16kmごとに駅家が設けられ朝廷から派遣される使者の宿泊施設や乗り継ぎの馬などが用意されていました。安侯駅家のあった駅路は、都から常陸国府（石岡市）までの東海道を延長し、陸奥国（現在の東北地方）へ行くために造られた常陸国最古の主要な道路でした。

平成十年、五万堀古道（長兎路）の発掘調査により10m幅の直線道路が発見され、八世紀前半に造られたことが判明しました。その延長上に位置する安居地内も古代道が通っていたことが確実となりました。翌年、安侯駅家推定地より南へ500mの民家の庭から「騎兵長十」と書かれた墨書土器が出土し、確かに古代道が通り、兵士がこの地を行き交う駅家の存在が改めて証明されました。

その後、本格的に周辺の学術遺跡調査が行われました。駅家としては珍しい「版築基壇」という礎石建物跡が発掘され、大規模な法倉（米蔵）が建っていたことがわかりました。その他、掘立柱二棟なども発見され、より駅家跡の可能性が大きい結果となりました。

今でも石岡市の一里塚から県道52号線（石岡城里線）を真直ぐ下ると古代道とほぼ同じ道筋をたどることが出来ます。途中小美玉市の「手堤」の地名は、八幡太郎義家が5万の兵隊を率いて奥州へ向かう時、大雨で池の水があふれて通れないので、手で土をもつて土手を築いたところから名付けられたと言われています。そこから岩間地内、農業総合センターへ入ると、転々と古代道跡が残っています。また、吉沼に入る山林には「五万人窪」という地名があり、軍勢5万人がここで雨宿りをしたといわれています。その他八幡神社や腰掛石など多くの伝説が残り、今でも遠いにしへの栄華を忍ばせています。

（市史研究員 川崎 史子）



安侯駅家推定地周辺発掘調査時の様子